能登半島地震と首相・知事の動向

元日の能登半島地震から、どうも気が晴れない。いまだ被害の全容も定かでないこともあるが、納得できないことも多いからだ。久しぶりに「松尾貴史のちょっと違和感」（毎日新聞 21 日、16 日執筆）を読み、同感することも多かった。途中まで紹介したい。

岸田文雄首相は 4 日の年頭記者会見で、能登半島地震の被災地に立地する原子力発電所に関する質問にまともに答える気配すら見せず、記者の声を無視して記者会見場を立ち去った。震災への対応に向かったのかと思いきや、BS フジの生放送に出演した。そこでは、自民党総裁選なども話題になったという。ちょっとしたサイコサスペンスのような光景があった。がれきに埋もれ、救助を待ち、寒さとひもじさにあえいでいる人たちがいる中で。5 日には経済団体や連合、時事通信社の新年会を「はしご」したのだという。もともと冷酷な人格ではないかという印象を持ってはいたが、ここまでくると旋律を覚えてしまう。

石川県の馳知事による「緊急事態宣言」も、出されたのは地震が発生してから 5 日もたってのことである。なぜこれほど時間がかかったのか。生死を分ける目安とも言われる被災からの「72 時間」どころの話ではない。「内外に大ごとだと思われぬよう」という意図があったとしか私には思えない。救援活動への指示や取り組みも、被害を過小評価したいという意図を感じてしまう。岸田首相が 4 日の記者会見で、諸外国からの支援を「現時点で一律に受け入れていない」と説明したことも、被災地の状況や受け入れ態勢の事情があったにせよ、被害を矮小化させたい意図を感じ取った。

馳知事は元日に東京にいて、地震発生後に首相官邸に入り、自衛隊のヘリコプターに便乗させてもらって石川県庁に入ったのはその日の午後 11 時過ぎだという。彼がいつになれば被災地を訪れるのかと思っていたら、何と 14 日にようやくである。馳せない知事ではないか。これまで被災地に行かなかった理由を問われた記者会見では「1 月 1 日から 24 時間、知事室に滞在しております」などと語った。元日の深夜に滑り込みで県庁に到着したのに、そう語れるのはなかなかの神経だが、岸田首相も同じ日まで被災地に入ることはなかった。

ダメージを受けトラブルが起き、避難経路であるべき道路も破壊されているのに、震度 7 の揺れを観測した志賀原発のある志賀町には岸田首相は近寄りもせず「地元の理解も得ながら再稼働を進める方針は全く変わらない」と言い切る。

能登半島の珠洲市や輪島市では、支援物資や救助隊が来ず、孤立状態が続いているところもあるという。国内の有志がボランティアとして向かおうとするも「迷惑ボランティアのせいで大渋滞が起きる」というデマがばらまかれる。岸田首相は、現地で救助活動をするわけでもないのに、コスプレよろしく防災作業着に身を包む。それで胸に赤い造花をつけて年頭のあいさつをしていたのは、滑稽ですらあった。

（2024 年 1 月 26 日）